

温泉えっち 一湯けむり美少女はえっちな気分になると博多弁に一

(仮題)

ヒロイン名 .. 霽石零穂しずくいしそう (仮名)

外見 .. 黒髪ロングの女性。年齢不詳。外見は10代後半

口癖 .. えへへ。火照っちゃいます。素敵。

性格 .. のんびり。えっちはその気になると好き。温泉に入ると身体が火照りエッチになりやすい。

雫穂「温泉えっち　ー湯けむり美少女はエッチな気分になると博多  
弁にー(仮題)」

雫穂「さーくる♪　え　る　ふ　ろ♪　ばい♪」

雫穂「ふわー 綺麗なお湯ー」

雫穂「床も岩だー あはは、ごつごつして痛いー」

雫穂「わー わー たくさんのお湯があるー ど、れ、か、ら入る  
うかなー」

雫穂「わー 椅子も木の椅子だー 素敵ー」

雫穂「あ、お隣、失礼しますね。よいしょ！」

雫穂「はー 素敵な温泉ですねー 入る前からうつとりしちゃいますー（お湯をかける音）」

雫穂「んー 早く身体を洗って入りたいですー こんな時は長い髪  
が疎ましいですねー」

雫穂「ふんー♪ ふんー♪ ふんー♪ ふんー♪」

雫穂「ふんふふーん。ふーん。ふーん。ふーん♪」

雫穂「わしわしー わしわしー あわあわ あーわ あわー わし  
わーきやつ！ いた！」

雫穂「いた！ 痛い！ 目にシャンプー入っちゃって いた……」

雫穂「あ…… んー！ んーつ！ ふう。はあ……はあ……」

雫穂「ありがとうございます 助かりました 私、普段はのん

びりしているんですが、温泉になると慌てん坊になっちゃうんですー」

雫穂「はー 本当に助かりましたー 命の恩人さんですねー」

雫穂「ん……あれ……男の人？」

雫穂「……私……もしかして……」

雫穂「間違えて男湯にはいつちゃつたんでしょうかー」

雫穂「あ、混浴」

雫穂「失礼しました。またまた、慌ててしましましたー」

雫穂「えへへ、すいませんー」

雫穂「……もしかして、お一人のところお邪魔してしまいましたー？」

雫穂「あ、はい。ありがとうございますー」

雫穂「私、早く温泉に入りましたんでー よろしければ……一緒に、させていただきますねー」

雫穂「お兄さんー　ありがとうございますー」

雫穂「お礼にー　よろしければお背中お流ししましようか？」

雫穂「はい　えへへ」

雫穂「では後ろを向いてくださいー」

雫穂「ではー　お兄さんのー　お背中へー」

雫穂「えへへー　ごしごしー　ごしごしー　お兄さんー背中広いー  
ごしごしー」

雫穂「はー　お兄さんもー　温泉好きなんですかー？　ごしごしー  
ごしごしー」

雫穂「んふふー　温泉はいいですよねー　ふわーっとして……幸せ  
な気持ちになっちゃってー　ごしごしー　ごしごしー」

雫穂「ここはー　露天風呂ー　青い空と白い雲ー　とつても開放感  
があつてー　素敵ですねー　ごつしごしー　ごしごしー」

雫穂「あ、お兄さんー　耳に石けんが残つてますよー　拭き取りま  
すねー　右耳からー　ごしごしー　ごしごしー」

雫穂「はい、左耳ー　ごしごしー　ごしごしー　んふふー　お兄さ  
ん綺麗になりましたー」

雫穂「背中をもう一度ーごしごしーあれ、お兄さんもしかして肌弱いですか？ ちょっと赤くなっています」

雫穂「んー やつぱりー 大丈夫ですか？ ヒリヒリして痛そうですー」

雫穂「はーー はーー 痛かつたですねー すいません」

雫穂「はーー はーー ん……」

雫穂「ん……はーー はーー ふうー ん？ 唾つばでもつけておけば治る？ 駄目ですよー」

雫穂「ん……どうしてもつていうのなら……ちゅー」

雫穂「えへへ」

雫穂「(耳元へのささやき声) あたしのじや駄目ですか？ ん……」

雫穂「ん……ちゅ……ちゅ……ちゅ……れええ……ちゅ……ん……ちゅー」

雫穂「はああ……ちゅ……ちゅ……ちゅ……れええ……ちゅ……ちゅ……れええ……ちゅ……ん……ちゅー」

雫穂「ちゅ……ちゅう……ちゅ……れええちゅちゅ……れええ……ちゅ……ん……はあ……」

……」

雫穂「気持ちよか？(博多弁) れええじつ……ちうちゅる」

ちう「はふ……はあ……ちゅ……ちうちゅ……ちゅ……れええ……」

雫穂「……あ！『ごめんなばい！いや、ごめんなさい！』めんなさい！」

雫穂「あうー あたし変なことしちゃいましたねー あうー」

雫穂「あたし……温泉にきちゃうと……変なテンションになっちゃつて……あうー」

雫穂「え？ あ、方言で話しどった？（博多弁） あ……また」

雫穂「私……興奮すると……その方言出ちやうんです」

雫穂「うー 都会の洗練されたレディーをー 目指しているんですがー」

雫穂「うまくいかないですねー」

雫穂「あ、本当に……すいません……」

お兄さん「お返しに背中を流してあげる」

雫穂「え？ あ……でも……えっと……じやあ……」

雫穂「お背中お願いしますー」

雫穂「はあ……背中……はい……ありがとうございます……」

雫穂「はあ……」

雫穂「こここのシャワー……とつても気持ちいいですねー あんまり

きつくなくて……」

雫穂「ん……はあ……お兄さん……背中……タオル気持ちいいです……はあ……」

雫穂「ん……はあ……ふう……ん……ふう……あ。お兄さん上手、あ」

雫穂「ふう……風がなびいてますね……火照ほてった身体に……とつても、とつても気持ちがいいです……はあ……」

雫穂「ん……はい、寒くないですか……はい……はあ……ふう……ん……はあ……」

雫穂「ん？ 背中赤いですか？ ふう……火照つてしまつているんので……いえ肌が弱い訳では……ひやん！」

雫穂「は！ ん！ んふ！ はあああああ……あ、いえ……確かに……あは……は……肌が弱かかもしま、しえん！（博多弁）

くうん！ ん！」

雫穂「はふ……あ……ん！ あ……は……はい……大丈夫ばい……ん……はふ……はあ……」

雫穂「あ……はあ！ あ……舌がひん！」

雫穂「あ！ は！ 首筋……も！ あはあ……あう！」

ひやん！ は！ は！ は！」

雫穂「はい……満遍のう綺麗にあ……は……はふ……ぱり優しか……  
……はい……あ、大丈夫ばい」

雫穂「あ！　あ！　あん！　は！　は！　はふう……くうん！　あ  
……」

雫穂「……は……は……はふ……あ、おしまいとキヤン！！」

雫穂「ま、前もと……は、はい！　お願ひし　は！　は！」

雫穂「おっぱい……は！　いえ、胸ばそげん……重点的に　はう！  
あ！　あ！　あ！」

雫穂「はふう！　指先で乳首こりこりつてあああああ！　ひやう！  
はふううう！　あああああ！」

雫穂「ひ、ひう！　お腹……あん！　はい……ありがとうございます！　じやい  
ます　ひやん！　は！　は！　くふ！」

雫穂「あ！　あ！　あ！　太ももしやわしやわしながら　はふ！  
ん！　首筋にキス！　あ！　ひ！　ひん！　ひやん！」

雫穂「は！　は！　は！　は！　あは！　あああああ！　おっぱ  
いそげん激しゅう！　あん！」

雫穂「ひ！」

雫穂「両手でえええへう！　乳首こりこりつて　あああああ！」

雫穂「手んひらで手んひらでえええ転がしやんで　は！　は！　は

あああああ！ ひ！ ひう！ ひやん！』

雫穂「は！ は！ は！ ああああ！ おっぱいもみし抱きながら

嗚呼ああア！ 乳首！ 乳首そげんこすられたらああああああ！」

雫穂「はああああ！ や！ ゃん！ あう！ は！ は！ は！」

雫穂「や、や、やあああんん！ 泡があ！ は！ ヌルヌルして気持ちよかばいううんん！！ あはああ！」

雫穂「は！ は！ お尻熱か！ あ！ おちんちんあたつて！ ひやひやう！！ あ！ あ！ はん！」

雫穂「は！ お尻ん割れ目に！ ゃん！ こすられながら！ あ！ あ！ あ！ おっぱいもお尻も同時にいよかよか！ やああ！ あ！ あ！ あ！ あは！ や！ や！ は！ はあ！」

雫穂「気持ちよかー 気持ちよか！ はああ！ は！ あ！ あ！ あ！ あ！ はああ！ んう！ 体中！ は！ 目茶苦茶にこす

られちよるばい！ はああ！ は！ は！ は！」

雫穂「ああ！ あ！ あ！ ああああ！ 火照つちやう！ あああ火照つてちやううううばい！ あああ！」

雫穂「ひん！ ひいん！ ひん！ ひいん！ あ！ あ あふう！ あ！ あ！ あは！ あ！ あ！」

雫穂「あ、はふ！ は、はふ！ はん！ あはあ！ はああ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！」

雫穂「ほ、火照つてちやうばい！！！ い、い……いくうう！！！  
あ！ あ！ は！」

雫穂「やああああ！ きやああああ！ ああああああああああ！！！」

雫穂「……は！ は！ は！ は！ は！ は！ ふ……はふ……はふ……はふ……はふ……は！」

雫穂「……ん、ん……もう……こげんエツチなことしやれたん初めて  
ばいー んー！」

「……くちゅん！」

雫穂「もう……もう……温泉にきて身体冷やして風邪引いちや、馬  
鹿みたいじやないですかあー！」

雫穂「し、り、ま、せ、んー もう……」

雫穂「……人が来ちやいましたね……」

雫穂「……ん、はい」

雫穂「続きは温泉の中……ちゅー」

雫穂「うふふ……いっちやいましたね……」

雫穂「でも、親子だと思われちゃいました……もう……身体は隠していませんが……」

雫穂「ドキドキしました。おっぱいちゃんとお湯で隠れてたでしようか？」

雫穂「頭だけお湯の上に出していたのでちょっとのぼせそうでした。えへへ」

雫穂「はあー　ふふ、でもこうして肩を並べて温泉に入っているとー  
雫穂「本当に家族にー　見えちゃうんですかね？」

雫穂「あ、自己紹介がまだでしたねー」

雫穂「私、雫石雫穂。つてていますー」

雫穂「水もー　したたるいい女って感じがしますよね？」

雫穂「お兄さんのー　お名前は？」

雫穂「わー　とつても素敵なお名前ですね」

雫穂「ん、ふー　はあー」

雫穂「ん、いいお湯ですね……はあー」

雫穂 「天然の温泉のぬるぬるが……うん、とつても気持ちいいです  
……はあ」

雫穂 「風が……気持ちいいです……ん……ふう……」

雫穂 「優しい木の匂い……素敵です……はふ……」

雫穂 「ん？」

雫穂 「えへへー どこ見てるんですか？」

雫穂 「こここの温泉……とつても澄んでますから……どこ見てるか丸  
わかりですよー」

雫穂 「……えへへ、私が見ている先も丸わかりですね……」

雫穂 「えへへ」

雫穂 「んー ちゅ」

雫穂 「はあ……ふう」

雫穂 「ん……ちゅちゅちゅう。ん。もうちょっと頭を下げてください  
い……ん、ちゅちゅ」

雫穂 「はふ……れええちゅ……ちゅちゅ……ちうん」

雫穂 「あむあむ……ちゅちゅ……ちゅちゅ」

雫穂「れえええ……れえええええ……」

雫穂「へう」

雫穂「お嫌いですか?」

雫穂「えへへ、好きですよね……」

雫穂「おちんちんの膨らみ見てたら解ります」

雫穂「ちゅる……ちうちう……ちゅちゅ……ちううれええ……ちう  
ちゅう」

雫穂「んぐちゅる……ちう、ちうちゅ」

雫穂「えへへ」

雫穂「耳たぶ舐めるの好きなんです……ちゅちゅ……グミみたいで  
ちゅるちゅ……変ですか?」

雫穂「ん……はあ……ちうちゅる……ん。奥まで……舌を差し込んで……れえええちゅる」

雫穂「えへへ」

雫穂「おちんちんがびくってしてるので……よく見えます」

雫穂「はあ……ん、ちうちる……ちゅれえええ」

雫穂「ちゅちうちる……ちゅるちる」

雫穂「はあ……お体が硬くなつてますよ……」

雫穂「はあ……ん……ちゅ……えへへ、ふとももきわつとしただけ  
でちうちゅる……んちうちゅる」

雫穂「はふ、びくつてすごいです。ちゅりるちう……ちゅう……ん  
雫穂「はふ……お尻硬くなつてます……ちうちゅるちう」

雫穂「ん……」

雫穂「ふ……は……ふ……」

雫穂「おちんちんさわつちやる」

雫穂「ん……こしゅ！　こしゅ！　んちゅ、れええちう……ん、ち  
う……こしゅ！　こしゅ！……ちうちう……おちんちん、こし  
ゅ！　こしゅ！　ちゅつ！」

雫穂「ちうちう……ちゅりう……しゅ、しゅ……はふ……ちうちう  
ちゅる、おちんちん、こしゅ！　こしゅ！」

雫穂「素敵ばい……びくびくつて」

雫穂「れええつちゅる……ちうへう……おちんちん、こしゅ　こし  
ゅ！　おちんちんこしゅ！　こしゅ！」

雫穂「えへへ……こん温泉、お湯がちよつとぬるぬるして……れ  
えええちうちうちゅる」

雫穂「おちんちんぱり、シコシコしやすか」

雫穂「はふ、おちんちん、こしゅ！ こしゅ！ ちゅ おちんちん、  
こしゅ！ こしゅ！」

雫穂「はふ、れえええ……ちうちゅる……ちうちう……れえちゅる」

雫穂「一定のリズムで、こしゅ！ こしゅ！ ちう こしゅ！ こ  
しゅ！ ちゅ！」

雫穂「ちうちゅ こしゅ！ こしゅ！ んれえ こしゅ！ こしゅ！  
ちゅ！」

雫穂「突然早くしてやるばい」

雫穂「こしゅ！ こしゅ！ ちゅちゅ こしゅ！ こしゅ！ れえ  
こしゅ！ こしゅ！ ちうちゅ こしゅ！ こしゅ！ ちゅつ  
いちう こしゅ！ こしゅ！ こしゅ！ んちゅ！」

雫穂「またゆつくり」

雫穂「こしゅ……れええこしゅ……ちう……こしゅ……こしゅ！  
ちうちゅ……ふふ、よかと？ よかとお？」

雫穂「れえええ……ちうちゅる……ちうちう……ちゅるれえ」

雫穂「じゅるちゅ こしゅー こしゅー んふう こしゅー こし  
ゅー れえ……ちじゅる こしゅ……こしゅ……ちうちう  
こしゅー こしゅー ちゅついちう こしゅー こしゅー  
はあ……ふう……こしゅー こしゅー れえちゅー」

雫穂「はあ……はふ……はあ」

雫穂「たまたまも……指ではじいちゃる」

雫穂「れえええ……しゅ、しゅ……ちうちゅりゅ、こしゅ！ こしゅ！ ん！」

雫穂「ちうつりゅ……ちゅるちうる……ちゅ、こしゅ！ こしゅ！ こしゅ！ ん！ はあ……こしゅ！」

雫穂「はふ……はあ……ちうちゅちゅ」

雫穂「指でたまたまはじく度に……ちゅりう……れえええ……ん」

雫穂「身体全体震えよーと……解る ちゅ」

雫穂「こしゅ！ こしゅ！ はふ あむ じゅる……こしゅ！ こしゅ！ ……はあ」

雫穂「れええ……ちうちゅる……れええれええるちう」

雫穂「ちうちゅ……ちゅるちう……れええええれるちう」

雫穂「はい……れえええ……ちう……いつでん……んれええ」

雫穂「いってくれんね？ いってくれんね？？ れええええ しゅ！ しゅ！ しゅ！ ちうちゅ しゅ！ しゅ！ しゅ！ しゅ！ しゅ！」

雫穂「……あ、温泉が汚れてしまうね……」

雫穂「ちゅるちゅる……じやあ出すとき腰ば浮かしてくれん……ん  
ちつりゅちゅる」

雫穂「ん！　ん！　ん！　しゅ！　しゅ！　しゅ！　しゅ！　しゅ！  
しゅ！　しゅ！　しゅ！　ん！　ん！　ん！　はあああ！」

雫穂「腰浮いてしもうたね、ん！」

雫穂「ちゅるちゅうちうれねえええ……んふ！　ちゅうちうり！　口に  
……口に出してくれん！　れえええ！　ちゅうちうじゅるちうち  
くん！　んつく！　んつく！　こく！　こく！　ん！　こく！」

雫穂「ちうちゅる……ちうつ……ちゅる……ん、口ん中に……れえ  
ええ……ちやんと出しえたね……れええちう」

雫穂「ん……温泉を汚さないですみましたー　ん！　ん！　ちう！  
かふ！　ん！　じゅる！　ちうちうちゅる」

雫穂「ちゅう……はふ……すごい……全部出たと思つたのに……」

雫穂「危うく温泉汚しちやうところでした……」

雫穂「ん、ちよつと……顔についちゃいましたね……ん……ちゅ」

雫穂「んふ……美味し」

雫穂「えへへ」

雫穂「はふー」

雫穂「なんだか……喉が渇いちやいましたー」

雫穂「えへへ、ちょっとまつててくださいね」

雫穂「はい……この温泉の湧き水です」

雫穂「ガラスじやなくてプラスチックのコップですよー　えへへ、お代わり自由です」

雫穂「えへへ……美味しいですか？」

雫穂「ここへ来る前に調べておいたんです。私、自前のコップ持ち歩いているんですよー」

雫穂「んっくんっく……はふ、美味し」

雫穂「火照つちやつた身体に……ん、とつても美味し……」

雫穂「ん？　むー。えへへ……お兄さん……さつきからどこ見てるんですか？」

雫穂「こう見えてもー　形には自信があるんですよ？　おっぱい」

雫穂「こうやつて……谷間を作ると……えへへ、ほら、温泉のお湯だつてすぐえちゃいます」

雫穂「どうしたんですかー　お兄さんー　じつとおっぱい見つめち

やつてー」

雫穂「そんなにー 頬を近づけて、はう！」

雫穂「あ、もう……ん……うん……私のおっぱいからは温泉は湧き  
出てませんよ、ひうん！」

雫穂「ん、ん、美味しいですか？ ん。はあ……」

雫穂「こここの温泉はとつても身体にいいですからねー はふ……あ、  
あ、ん」

雫穂「あ、もう……えへへ……あは……ん！ うちんおっぱいん魅  
力に気がついたとー あ、あ……はふ」

雫穂「どうだー まいったかー えへへ……ふう……はあ……はふ  
う……」

雫穂「ひ！」

雫穂「ん、あ！ もう！ お兄しやんつたら！ はん！ はふ！  
はふ！」

雫穂「ま、また火照ってしまうようー」

雫穂「あ、は、はふ……あ、あん……は、は、はふ……ん」

雫穂「お兄しやん……そげん乳首好きなんかー ひやん！」

雫穂「ん、ん、ふう……は、はふ……は、は……はん」

雫穂「んー　もうー」

雫穂「えへへー　お兄ちゃんの温泉もー　すつてしまふねー」

雫穂「んー　ちゅ」

雫穂「れえええちうちゅちゅ……ちうちうちゅ……ちゅちゅ」

雫穂「れえええちうちゅちゅ……ちうちうちゅ……ちゅちゅつる」

雫穂「えへへー　お兄ちゃんの口から湧き水もろうてしまつたー  
ん、優しいキス」

雫穂「れええええ、えええ」

雫穂「ん……ちうちうちゅり」

雫穂「今度はうちん湧き水飲んでくれんね？　れえええ、ええ　れ  
えええちうちゅちゅる」

雫穂「あ、はふ……は、はふ……ちうちゅる……ちう」

雫穂「ちゅちゅ……ちうちういちう」

雫穂「はふ、素敵ー」

雫穂「ん、ちうちゅちうちう……あ、はふ。おっぱい揉みながら……  
きす？　ちうちゅちう」

雫穂「えへへ」

雫穂「うちんおつぱい好きつていつてもろうてうれしか。ちうちい  
うちう」

雫穂「ひやん！」

雫穂「は、は……お尻も……ちうちゅちう」

雫穂「ん、もおう」

雫穂「また火照つてしまうけん……ちうちうちゅる」

雫穂「ん！　んん！　んんん！　あむ！　れえええちうちゅる」

雫穂「お兄しやん！　乳首こするん上手ん！　は！　ん！　ん！  
んん！」

雫穂「こん温泉ヌルヌルやけんばり気持ちよかはうー」

雫穂「ん！　ちう　ちゅう！　ちうちうれええ」

雫穂「お兄さん……キス好きじや？　ちうちゅ　ちゅる　ちうち  
う！」

雫穂「ちゅちゅちう！　ちうちう　ちゅる　ちう！　れええへう  
ちうちうる！」

雫穂「ん！　ん！　んちう！　はつ！」

雫穂「キス夢中になつとーよ……ちうじゅる……ちうちうちる……」

雫穂「もつと……ちう……ん……お兄しやんの唾液……ん……れえええ飲まして……ちうちゅる」

雫穂「ちゅちゅちゅう……素敵ばい……素敵ばい……ちうつちゅう……ちうれええちうるちるつる」

雫穂「あはあ……キスう……ぱり火照るう……れえええちうちうちうれええ」

雫穂「ん ん！ ん！ ちうちうれええちうじゅる！ ちうちれええじゅり！」

雫穂「は！ は！ ちうれええじゅる！ れうちゅちゅつ！ ちうちうれええ」

雫穂「お兄しやんの唇、ふにふにして美味しあむはむちう！ れええじうじゅる」

雫穂「ん！ ちゅ！ ちゅ！ ちう！ れええろ！ じる ちゅる！ ちゅうちゅつ！」

雫穂「キス気持ちよか！ ん！ ちうじゅ……ぱり好き、ん！ ちうじゅる」

雫穂「ん、れう！ ちゅちう……んは……ちうじゅる……ちうれえう……ちゅちゅ！」

雫穂「ん！ ちうじゅる……はあ！ 気持ちよか！ ん！ ちゅ！ ちゅちゅうう！ ちうえろ！ じるちゅる！ ちゅうちゅう……」「……」

雫穂「唾液もっと飲ましえてれええちうちじゅる！」

雫穂「ん、んくつ！ ちゅちゅうじるちゅる……温泉と唾液が混じやり合うて うまかはむ！ じる……ちうちゅちゅう」

雫穂「ん！ ん！ ちうじるうちう……れえちう……ちゅりちう……ちうちゅ……ちゅちゅ……ちゅ」「……」

雫穂「は！……は！……は！……は！ あ…… お兄さんー 火照つちやいますう」

雫穂「はあ……はあ……はふ……は……はあー」

雫穂「はあ……はあ……はあ……はあ……ん……」

雫穂「んー……」

雫穂「……」

雫穂「……最後まで……（耳元に吐息）として……」

雫穂「こつち……こつちです、はい……さっき水を汲んできたとき  
に……物陰があつたんです。はい、早く来てください」

雫穂「え、ぐいぐい手を引っ張られると？　あ、痛かったですか、  
ごめんなさい……」

雫穂「私その……火照つちやうと……ちよつと」

雫穂「もうー！　興奮してるなんてはつきり言わないでくださいー」

雫穂「お兄さんのおちんちんさんもー」

雫穂「こんなに大きくして……ばか……」

雫穂「んしょ……んしょ……」

雫穂「ここです……はい、ここなら……大丈夫そうでしょ？」

雫穂「で、ど、どうします……や、やだー　あはは、すると決めち  
やつたら……そのふ、震えてきちやつて」

雫穂「あ、こ、こうですか？　岩場にもたれて……」

雫穂「う、お尻を突き出すんですね……ちょ、ちよつとこの体勢は  
さすがに恥ずかしいですようー」

雫穂「う！　う！　うー！　そんなにお尻見ないでくださいようー  
う！　う！　う！」

雫穂「は、早くしてくださ……って、何言わせるんですきゃん！」

雫穂「あはああ！！ お尻……あはあ！！！ 顔埋められて！」

雫穂「お尻ん割れめねぶられてしもうてますううう！ はああああ！ はああああああ！」

雫穂「は！ は！ は！ お兄しやん！ そげん事しやるーと！ は！ は！ は！ んー！ うち初めてで！」

雫穂「あ！ は！ は！ あはつ！ あ！ はああ！」

雫穂「ひうん！？」

雫穂「いえ！ イヤやなかばい！ ひやん！ き、気持ちよか！ あう！ あう！ あう！ はうううう！」

雫穂「ひ、ひよかよかい！」

雫穂「よかよかい！ お兄しやん！ お兄しやん！ そこ！ お尻ん穴ばい！ そこ舌ねじ込んじやあああ……あああん！ あはつはああ！」

雫穂「やつつだあああ！ こげん所で！ はう！ はう！ はあああ！ はあああ！！！ やあああ！」

雫穂「あ！ はあああ！ はああ！ だめ！ だめええ！ だめええ！ はあああ！」

雫穂「え？　いや！　やめんでくれん！　やめんでくれんよう！  
気持ちよかばいう！」

雫穂「は！　は！　は！　は！　ひいいん！？？？」

雫穂「お尻すわれながらおっぱい！　はああああ！　ん！　うん！  
揉まれちゃつとーよう！！　はふううううううう！！！」

雫穂「あは！　ん！　かふ！　…はあああああ！　はあああああ！  
はふ！　はふ！　ひう！　ひやん！」

雫穂「あう！　あう！　あはう！　あう！　は！　あ！　あ！　あ！  
はあ！」

雫穂「んー！　？？？」

雫穂「そこお！　めめしやん！　キスうう！　はあああああ！  
はあああああああ！」

雫穂「あ！　あ！　あ！　あ！　はああああ！」

雫穂「ずっと　ずっとまつとつたんばいよおおおお！！！」

雫穂「んぐう！　きやう！　ひやん！　あはああああ！！　はああ  
ああああ！！！」

雫穂「あああ…素敵…は！　は！　はあ…素敵ばい…は！  
は！　はあ！　はああ！」

雫穂「火照りすぎてええええ　おかしゅうなつてしまふー　きやう

雲穂 「きやい  
ひう！？」

零穂「クリトリスうううう！　舌ばいわれながら　きやよかあ！  
ひ！　ひ！　ひうん！　ひい！」

秉穂「また乳首いいよかよか！  
はあああああああ！」  
ひ、よかん！  
はああああん！

雲穗「は！ は！ は！ は！ はああ！ はああ！ はああ！」  
ああ！」

穂  
一  
は、  
は、  
はふ  
……  
は……  
あ、  
……  
は、  
きやい！？

雫穂「や、やすましえて……きやああああああああ！ そげん！ まだ  
いっとーんに！ きやああん きやう！ きやう ふううう  
うううううううう！」

零穂「んきやあああああ！　身体ー！　めちゃくちやに気持ちよし  
えんでえええ！！！　は！　は！　は！　あは！　はああああ  
あああ！！！！！」

零穂 「今は本当に！　だめばい！　だめばい！　あはあ！　だめ！  
はあああ！　おかしゅうなつてしまふけん！　はああ　氣  
持ちよすぎてああああ　おかしゅうなつてしまふけん！　は  
は！　は！　あは！　はあああ！　はああ！　はあああ！」

雫穂「や、や、やあああ！ん！きやうきやう！きやん！はあああ！はああああ！」

雫穂「あ！はあ！はあ！はつ！はつ！あう！ん！きやあ！はあああ！」

雫穂「んん……は……は……あ、……あふ……は……」

雫穂「は……は……はふ……は……はふ……」

雫穂「は……は……は……」

雫穂「ひ、酷いですよう……び、びつくりして……その、ちょっと怖かつたですよう……」

雫穂「も、もう！そんなニヤニヤしないでください！意地悪です！」

雫穂「そんな意地悪な人には……もうさせてあげませーん」

雫穂「……むー」

雫穂「……むー本当ですかー？」

雫穂「優しく出来ますかー？」

雫穂「……むー信じられませーん」

雫穂「……何、後ろから抱きついているんですかーむー」

雫穂「おちんちん……お尻にペチペチしないでください むー」

雫穂「……本当に反省しましたかー」

雫穂「むー」

雫穂「はあ……」

雫穂「……じやあしてもいいです」

雫穂「ひん！」

雫穂「ん！ ふう！」

雫穂「もう……すつごく火照っちゃってます……お兄さんのおちん  
ちん……」

雫穂「わ、わたしだけ……いつちやつたから当たり前ですよねー」

雫穂「ん……どうぞ……今度は優し……きやん！」

雫穂「も、もう！ 嘘……つき！ ひん！」

雫穂「んー！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ は！ はあああ！ はああああ！」

雫穂「は！ は！ は！ は！ は！ はふ！ ふ！ ふ！ はふ！  
は！」

雫穂「いきなりい……奥まで！ あ！ は！ は！ つきすぎばい！  
……は！ は！ はん！ はん！ あん！ あん！ ああ  
ん！」

雫穂「は……は、は……だめ……しゃつきんで敏感に……は、は！  
は！ はん！」

雫穂「だ、大丈夫ばい！ 大丈夫ばいけどおおお！！ あああ！  
あああ！」

雫穂「気持ちよすぎて大丈夫じやあああ！ はああ！ なかで  
うあああああ！」

雫穂「うー！ うー！ んー！ んふうううう！！！」

雫穂「お兄さんの中でええええ！！ 暴れてええ……堅かところが  
ああああ はうううううううう！ 奥にあたつとーうううう！ は  
ふうううう！」

雫穂「かき回しやるーとはあああ！ 奥でやだああああ！ はあ  
ああ！ 気持ちよかようう！ はああああ！」

雫穂「あ！ あ！ あ！ あ！ は！ はあん！ はん！ はああ！  
はああ！ あ！ あ！ あ！ あ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ は！ あああ！ はああ！ はあ  
ああ！ あ！ あ！ あ！ あああ！ はああ！」

雫穂「は！ は！ は！ は！ はあああ！ はああ！ はあ  
あ！ あ！ あ！ はああ！」

秉穂「す、素敵ばい……素敵ばい……うう！ は！ は！ は！  
はああ！ は！ ああん！ あう！ あん！ あうん！」

零穗一  
?

秉穂 どうしちやつたんですか?」

穂

零穂 一 終わつちやつたんですか?」

穂  
—  
...

「やだやだ……もつと、もつとしてくださいよう！ 気持ちよ  
くしてくださいよ！ こんな所でやめるなんて酷すぎますよ  
うきやん！」

零穂「んきゃんきゃあ！ きやう！ あはあああ！ あはん！ ああ！ これえええ！ あー これええええ！ 素敵ばい素敵ばい！」

零穂「き、き、気持ちよかよう！ 中で！ 中で！ あああ！ ば  
り熱かばいううう！」

零穂 「あ！ あ！ は！ あ！ あ！ あ！ あん！ あ！」

雫穂「は！ は！ あ！ は！ は！ しゅき！ しゅてき！ は！  
あ！ あ！ あ！ は！ は！ は！」

雫穂「は！ ああ！ お、お兄しやんあああ！ ああん！ あん！  
は！ あ！ あ！ はう！ はう はうう！」

雫穂「色んなところに当たつてええええええ！ ああ！ は！ はあ！  
ん！ 感じすぎてしまえばい！ は！」

雫穂「は！ は！ あ！ あは！ は！ は！ あ！ あ！  
は！ は！ はあああ！」

雫穂「おっぱいいい！ さつきみたいに揉んでくだしやいきやああ  
ああ！？ は！ は！ は！ あう！」

雫穂「ん！ 乳首こすつてええ！ ひん！ ひいよか！ ひいいん！  
あはああああああ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ はつ！ あ！ あは！ あは！  
は！ は！ は！ は！」

雫穂「ん？ キス？ キスしたいとー？ きやつ！」

雫穂「ん！ ちゅ！ れえちう ちゅれえ！ ちうちう ちゅ！  
んん！」

雫穂「は！ はつ！ チューしながらん！ れちうじゅる！ お  
っぱい揉まれとう！ れええちうじゅるちう！」

雫穂「ん！ んー！ ちうちうじゅり！ は！ は！ は！ ちう

ちう！ はああ！ ちゅちうじる！ んー！ んんー！

雫穂「んー！ 頭の中真っ白になつとーよー！ ちうちうじる！ ちうちう！ は！ は！ ちゅうれえじる！ ん！ ん！」

雫穂「めめしやんおかしくなつて！ は！ あう！ ぎゅうぎゅう に！ は！ は！ おちんちん放しやん！ くなつてえええ は！ は！ は！ は！ はああ！ は！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ は！！！ は！！！ はああああ！ はああああ！ はああああ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ は！！！ はああ！！！ はあああ！ はああ！ はうううう！！！」

雫穂「も、もういつたつちやよかか！？ いつたつちやよかか！？ あああ！ きやんきやん！ きやああ！ はあああ！ はあああ！」

雫穂「あ！ あ！ ああ！ お願よかい！！ 一緒にいこいいい！！ 一緒にいいいい！！！ あ！ あ！ あ！ あ！ あ！」

雫穂「あう！ あう！ あう！ あう！ は！ は！ あ！ あは！ はあ！ はあ！ はあ！ はあつ！！！ はあつ！！？」

雫穂「あああああ！ きやああああああ！！ きやああああああ！！ ！」

雫穂「ん！ ん！ ん！ ん！ んん！！！ んーーー！ く ふ……はあ……はあ……あ……！」

零穂「は……は……は……」

零穂 「は……は……はふ……はふ……はふう……」

零穂 一よかつたあ……今度は……いつてくれたんですねー

穂  
一ちゃんと中に出でますよーん！  
抜かないでえー！

温泉に

零穂「はあ……ふ……は……はあ……は……」

零穂「ええ」

雫穂「んー　ちゅ」

雫穂「ちうちうちうれえええろちう」

雫穂「えへへ、ダメですよー」

雫穂「ちうじるちう……ちゅるちう」

雫穂「ちうちる……じゅるちう」

雫穂「もつと足を二字に開いてー　おちんちんー」

雫穂「この温泉の上にさらけ出してくださいねー」

雫穂「えへへ」

雫穂「ちうちうちじる……れええちうじゅる……れえう」

雫穂「えへへ」

雫穂「さつきは私にあんな恥ずかしいことー　好き勝手されたんで

すからー」

雫穂「お・か・え・し」

雫穂「んー　れえええちう……じるちゅるちう」

雫穂「ちゅちゅん……ちうちゅるちう」

雫穂「えへへ……好き勝手、恥ずかしい格好でー」

雫穂「ちうじるちゅうちゅちう……れえええ」

雫穂「敏感なところいじられる気分はどうですかあ?」

雫穂「れえええじるちゅうちう……れええちう」

雫穂「お兄さんのおちんちん……いつでも私が使えるように……れ

えちうじゅる」

雫穂「温泉にー れえええ……ちゅつ! 飾つておきたいです。ち  
うちうれえええ……」

雫穂「れええちうじゅる……ちうちうれええちゅう」

雫穂「腰がびくんびくんしてますよ? れえええちるちう」

雫穂「ちゅちゅちう……ちうちゅじゅる」

雫穂「ん? いつたばかりだから? きつい? ダメでーす」

雫穂「えへへ」

雫穂「先端をこう……ちゅう! 唇で挟んでちうれええ! 思いつ  
きり吸い込んであげまーすれえええじゅるじゅぼじゅる!」

雫穂「ん! ん! ん! んふう?」

雫穂「ダメでーす。根元を押さえていかせませーん」

雫穂「えへへ」

雫穂「ちゅうじるれえちう……れえええちうちうちうじゅる」

雫穂「じゅるちうちうれええ……ちじゅるい……ちうちう」

雫穂「いきたい？　いきたい？　いきたいですか？」

雫穂「ダメでーす」

雫穂「えへへ」

雫穂「れええじるちゅいちゅぽん！　ちうちうちゅるり！」

雫穂「んふ、れええ……ちう……んちゅ……ちゅちゅちう」

雫穂「んー？　ほんとにー？」

雫穂「ほんとうに反省してますかー？」

雫穂「……じゃあいかせてあげます」

雫穂「じゅるじゅるじゅぽちうちうれええ！　じゅるじゅるじゅるじゅる！」

雫穂「じゅるちうれええちう！　じゅぽじゅるちう！　れええちう

ちうちう」

雫穂「んん！？ ん！ ん！ んつく！ んつく ん！ こく！  
こくつ！ ごくつ！」

雫穂「ん……ちゅ……んちゅ……ちゅちゅ……れえちゅはふ……は  
むちゅ」

雫穂「はふ……は……はあ……ふう……温泉を汚さずにちゃんとお  
口に出せましたねー でも、私の顔まで飛び散るなんて……」

雫穂「まだまだとつても元気ばい！」

指ですくい舐め取る

雫穂「ん、美味し……」

雫穂「はあ……お天道様はまだ昇ったまま……」

雫穂「絶好の温泉日和ですねー」

雫穂「えへへ」